

第2節 陸前高田市&立教大学：陸前高田グローバルキャンパス

八代 仁（岩手大学）

五味 壮平（人文社会科学部）

井上 博夫（岩手大学名誉教授、COC推進室客員教授）

1 はじめに

2017年4月25日、岩手大学と立教大学が陸前高田市との連携のもとに運営を行う陸前高田グローバルキャンパス（愛称：たかたのゆめキャンパス）がオープンした（写真7-2-1）。国内のみならず国外からも大学生や大学関係者等が同市に來訪し続け、市民と交流を育みつつ、震災の教訓等を学ぶことができる拠点として、また教訓を発信していく拠点としての役割が期待された施設である。

震災で甚大な被害を受けた陸前高田市において、震災後、多数の岩手大学教員、学生がさまざまな活動を行ってきた。調査研究、技術的支援などで関わった教員も少なくない。また、三陸復興サポート学生委員会、岩大E_codeなどの学生チームは、同市を主要な活動場所（の一つ）として継続的な関わりを続けてきた。

立教大学は、夏季の林業体験など、東日本大震災以前から陸前高田市と継続的な関わりをもってきた。そして、震災後はボランティアや市民へのサービスをきわめて精力的に行ってきた。

同市との関わりが深いこの2つの大学が協働して設立したのが陸前高田グローバルキャンパスである。地元の国立大学と東京の私立大学とのユニークな組み合わせは、さまざまな強みと可能性をもち得るといってよいであろう。

陸前高田グローバルキャンパスが開設されるに至った経緯については第1部第5章第5節に詳しく説明されている。この節においては、オープン後にこのキャンパスを舞台として行われてきたイ



写真7-2-1 陸前高田グローバルキャンパス

ベントやプログラムを紹介したうえで、2018年時点で抱えている課題、そして将来に向けた展望などを、開設・運営に関わってきたものの立場から考察していく。

以下、第2項においては、開設以来（厳密には開設以前から）、陸前高田グローバルキャンパスとの関連で行われてきた営みを、とくに岩手大学が中心的な役割を果たしてきたいくつかのプログラムに焦点をあてながら紹介する。また第3項において、現時点で抱えている課題、それを解決するための戦略についての考察、そして将来の展望について述べていく。なお、本節の特に第3項の内容は基本的に「陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム2018」における発表の要旨（五味, 2018）に修正を加えたものである。

なお、第1部第5章第5節に述べられているように、陸前高田グローバルキャンパスの開設準備と開設後の運営は、陸前高田市、岩手大学、立教大学の連携推進協議会企画運営委員会、および陸

前高田グローバルキャンパス運営機構役員会により、岩手大学内においては「陸前高田グローバルキャンパス事業岩手大学推進室」により行われてきた。この原稿の執筆者以外にも両大学の多くの教職員、さらには陸前高田市関係者の尽力のもとに推進されてきた事業である。

2 陸前高田グローバルキャンパスで行われてきたこと

陸前高田グローバルキャンパスは、陸前高田市立高田東中学校として使われてきた校舎の2階・3階部分を両大学が陸前高田市から借り受ける形で運営されている。ラウンジ、元音楽室を改修したモンティ・ホール、講義室、会議室、ワークショップルーム、多目的室、和室などが置かれている。両大学関係者は無料で利用できる。それ以外の組織、団体に対しても低価格でレンタルを行っている。また、研究室、シェアラボなど、長期利用者を対象に貸し出す空間も設けられている。

第1部でも触れられているように、グローバルキャンパスのオープン前から、同施設オープンの告知や説明も兼ねたイベントが複数開催されてきた。2017年1月の「陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム2017」においては、それまで陸前高田において活動を行ってきた大学同士、相互に活動内容や経験を共有しようというコンセプトのもと、2日間にわたって多くの発表・報告がなされた。大学関係者のみならず、陸前高田市やその周辺からの市民の参加が多く、大学と市民との間のつながりがそれぞれに形成されてきたこと、また大学への期待が高いことが伺われる機会となった。また同2月には、立教大学主催で、同大学客員教授である池上彰氏の公開講演会「グローバル社会に生きる」が行われ、高校生など多数の参加があった。

こうした経緯を経て、4月25日のオープンを迎えたわけであるが、オープン以来、2017年度

内の同施設の利用者は約5,000名となり、まずは順調な滑り出しを見せているといっていよう。2017年度に開催されたイベントとしては、たとえば、

- ・立教大学河野研究室と岩手大学との合同哲学カフェ
- ・岩手大学の1年次学生に対して実施されている「震災復興に関する学修」
- ・「陸前高田グローバルセミナー2017」（ハーバード大学と岩手大学大学院生とのジョイントプログラム）
- ・岩手大の有志団体岩大E_code主催「あがってかだって大作戦I～IV」（市民と大学生の交流の場づくり）
- ・立教大学「陸前高田プロジェクト」（立教大学とスタンフォード大学の合同フィールドワーク）
- ・関西大学主催、マルゴト陸前高田のコーディネートのもとで実施された「国際ジョイントPBLプログラム（eJIP）」（関西大学とメキシコ、ベトナム、関西大学の学生のフィールドワーク）
- ・復興庁岩手復興局主催「結の場」（地元企業と支援意思のある企業のマッチングの場の提供）
- ・「陸前高田アートプロジェクト」（就労支援施設あすなろホーム利用者と岩手大学で特別支援教育を学ぶ学生たちとのアート活動）（後述）
- ・COC+ふるさといわて創造プロジェクトの事業としての「アバッセたかた&図書館プロジェクト」（岩手大学、岩手県立大学、明治学院大学によるアバッセ入居店舗へのインタビューと情報発信）（後述）
- ・立教大学スタディツアー（立教大学の留学生と日本人学生のジョイントプログラム）
- ・立教大学主催シンポジウム「高田から世界を考える～難民の世紀に生きる私たち～」
- ・岩手日報社企画の防災プログラム「いざ・トレ in 陸前高田」

・「陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2018」(後述)

などがあり、運営主体である立教大学、岩手大学はもちろん、多様な主体による取り組みが行われてきた。地元団体の定期的な利用も増加している。

2018年度以降も、複数の大学や組織がジョイントするようなプログラムをはじめとして、多様な催しが次々と開催されている。実施されたイベント等の多くは、グローバルキャンパスのウェブサイト「お知らせ&最近の取組」(<https://rtgc.jp/news/>)にまとめられている。

以下、岩手大学が関わってきた取り組みのうち、3つを選んで詳しく紹介する。

(1) 陸前高田アートプロジェクト

陸前高田市にある障害者就労継続支援事業所あすなろホームの利用者さんたちが、土曜日はクラブ活動として様々な活動をしており、その一つとしてアート・クラブがあった。グローバルキャンパスができてからは、ここを活動の場にして、岩手大学教育学部特別支援教育コースの学生たちと一緒にアートに取り組むことになった。いろいろな画材を用意して、参加者が好きなものを選んで絵を描いたり、粘土細工をしたり自由に取り組んでいる(写真 7-2-2)。

特別支援教育の学生は、特に指導や援助をするのではなく、自分たちもアートに取り組みながらホームの利用者さんに寄り添うようにしている。



写真 7-2-2 アートプロジェクトの様子

学生たちにとっても、利用者の人たちと接することにより、毎回、感じる人が多いようだ。

2018年度からは、あすなろホームに加えて、「りあんのかい」という小学生のグループも加わり賑やかになっている。2019年3月の「陸前高田グローバルキャンパス春呼び祭」では作品展も実施することになった。

(2) アバッセたかた&図書館プロジェクト

市街地のかさ上げ工事が長らく続いていた陸前高田に、2017年4月ようやく中心市街地の核となることが期待される大型商業施設「アバッセたかた」がオープンした。そこで、学生の地域学習と中心市街地の応援を兼ね合わせたCOC+事業を立ち上げた。

岩手大学の「初年次ゼミナール」として、アバッセ専門店街の店舗取材し、ブログで発信する取り組みだ(写真 7-2-3)。記事では、お店の紹介はもちろんだが、震災から仮設商店での事業再開、そして中心市街地に再建するに至った経緯を書き、特にそこでの人の歩みに着目した内容にした。

岩手県立大学の学生も授業外で参加し、陸前高田に来ていた明治学院大学の学生も加わってくれた。学生にとっても学ぶことの多い事業になったと思う。

2018年度は、岩手大学と岩手県立大学の両大学で正規の授業として位置づけ、大型商業施設の周囲に立地しつつある個別店舗の取材へと活動を



写真 7-2-3 アバッセたかたの前で

広げている。

記事は、次の URL から見ることができる。

2017 年 11 月版 <http://abassetakata.blogspot.com>

2018 年 12 月版 <http://tiiki-map.net/?p=112>



(3) 陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム 2018

このイベントは、グローバルキャンパスオープン前のプレイベントとして開催された大学シンポジウム 2017 の後継イベントとして実施されたものである。

大学シンポジウム 2018 開催にあたっては、実行委員会を組織したが、岩手大学と立教大学の教職員以外に、前年のシンポジウム参加者の中から九州産業大学、関西大学、お茶の水女子大学の教員にメンバーに入ってもらい、大学間連携のもと企画、準備を進めてきた。

2 年目のシンポジウムを実施する上で、地元の人々にも単なる観客としてではなく、登壇者あるいは討論者として参画してもらう方向で様々な工夫を行った。地元団体等からの活動報告を集めた地元セッション、気仙地域の中高生とシンポジウ



写真 7-2-4 陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2018 ジャムセッション

ム参加大学生、そして市内で働く若者などが一堂に会して議論を行うジャムセッション（写真 7-2-4）、大学の園芸研究者、園芸機械の技術者、そして地元の園芸農家が園芸振興について語り合うパネルディスカッションなど、多彩なプログラムが組まれた。また初日の夜に行われた懇親会でも、地元参加者、大学教職員、学生などが同じテーブルを■んで余興を行うなど、立場を超えた交流が行われた 2 日間となった。

大学シンポジウム 2018 は、大学間連携、大学と市民との協働という点で、陸前高田グローバルキャンパスの強みおよび目指すべき姿が具現化した取り組みであったと考えている。

3 陸前高田グローバルキャンパスの課題

(1) 4 つの課題

陸前高田グローバルキャンパスの利用が広がる一方で、2018 年 9 月現在、同施設はまだいくつかの大きな課題を抱えていると言えよう。以下ではこれらの課題について考えていきたい。

なお、本稿のこれ以降の内容は、五味の主観によるところも多く、文責は五味にある¹⁾。

陸前高田グローバルキャンパスの課題としては、

- ①市内外への認知度の向上
 - ②利用者への付加価値（グローバルキャンパスならではの価値）の提供
 - ③持続可能な運営体制の構築
 - ④岩手大学と立教大学、両者の強みとポテンシャルを精査した上での戦略的運営
- があると考えられる。

まず、①であるが、この施設はまだ、地元市民、両大学の関係者、さらには国内外の大学関係者をはじめとした同市外の人たちに十分に理解・認知されているとは言えないだろう。また、この施設が何を目的として設置されたのか、どのような状況の達成が目指されているのかについても、よりわかりやすく提示していく必要がある。

関連することだが、潜在的な利用者に対して、この施設を使うことのメリットはどこにあるのか、この施設ならではの付加価値は何かを理解してもらう必要がある(②)。陸前高田グローバルキャンパスが単なる貸し空間にとどまるようであれば、その存在意義は次第に薄れていくに違いない。陸前高田市周辺だけでも、コミュニティホールに加え、各地区のコミュニティセンターなど、市民や市外団体が借りることのできる施設はまちづくりの進行に伴い増加している。同キャンパスが潜在的なポテンシャルを発揮し、必然的存在になるためには、このキャンパスの潜在的利用者それぞれにとっての価値を最大化することが必要となる。

また③であげたように運営の持続可能性についても課題と言える。施設管理費用の確保、事業費の確保、関係者のマンパワー(両大学の常駐スタッフは存在せず、管理を地元のNPOに委託している状態である)、いずれもぎりぎりで行っている状態であり、状況の変化により、とたんに運営が難しくなることもあり得る。施設の存在意義と必然性をより高めていくことは、その意味でも重要である。

さらに、④について、2017年度はとにかく設立すること、そして運営を軌道に乗せていくことにエネルギーが注がれてきた。月1回のペースで関係者が陸前高田に集まって緊密な情報共有と議論が行われてきたが、まだ両者のもつポテンシャルが最大限に引き出され、またかけ合わされているとは言えないだろう。

(2) グローバルキャンパスの基本方針の再確認

さて、まず上に掲げた4つの課題のうち、①については、グローバルキャンパスの目指すところをより明確に定め、発信していくことが重要であるだろう。

そこで2018年度、岩手大学、立教大学、陸前高田市の三者が連携のあり方を協議する場である

連携推進協議会企画運営委員会では、1年間の運営の経験に基づき、キャンパスとしての主催事業を実施する上での基本方針を再確認することとした。そして、陸前高田市からの期待をふまえて、

- 1) 大学生が絶え間なく訪れる交流のまち、陸前高田への貢献
- 2) 防災・減災をどこよりも深く学べるまち、陸前高田への貢献

という2つの柱を設けることとした。そしてこれら2つの基本方針に基づき、グローバルキャンパスとして実施していく事業を計画していくこととした。

(3) 潜在的利用者に関する考察

さて、以下では特に先にあげた課題のうち、②と③について考察してきたい。そこでまずは同キャンパスの潜在的利用者について整理してみたい。陸前高田グローバルキャンパスの主要な利用者として想定されるのは、1) 陸前高田、およびその周辺市町村の住民・団体、2) 陸前高田市(自治体)、3) 陸前高田や気仙地域を訪問する国内外の大学関係者、4) 震災後の同市の経験を通して、防災・まちづくりについて学びたいと考える人々、そして5) 運営主体としての岩手大学と立教大学関係者が挙げられる。もちろん、それ以外にも利用者は存在するであろうが、まずはこれらの潜在的利用者に対して、それぞれどのような価値を提供できるかを考えたい。

まず、1) 陸前高田市民・団体に対してであるが、キャンパスがもたらし得る代表的な価値としては、a) 大学関係者や大学の持つ技術や知識との接断面となり、地元の問題発掘、問題解決の機会が提供されること、b) キャンパスが大学生世代の若者が集う場所となり、そのエネルギーが市民にも伝播し、地域の活力向上がもたらされること、そしてc) 生涯学習の場として機能することなどが挙げられるだろう。

2) 陸前高田市（行政）に対しては、a) このキャンパスが存在することにより実質的な交流人口が増えること、b) このキャンパスが震災後にできた（とくに国内外の大学関係者との）交流をより長く継続、あるいは強化する拠点となること、c) ここを活用したことをきっかけとする移住者や定住者がうまれること、d) 震災とその後の復興プロセスにおいて同市や市民が経験した知見を「知恵」として体系的にまとめあげる拠点として機能すること、e) d) で得られた知恵を広く国内や世界に発信することを通して、陸前高田市や三陸地域の存在感の向上に貢献することなどが挙げられるだろう。

3) 陸前高田や気仙地域を訪問する国内外の大学関係者（学生を含む）にとっては、a) 震災から時間が経ち、資金的あるいは目的的に、陸前高田を訪問する必然性がどうしても薄れていくなかで、同市、同地域への訪問の価値を高め、必然性を見つけられる空間として機能することがキャンパスの提供し得る最大の価値であろう。

4) 震災後の同市の経験を通して、防災・まちづくりについて学びたいと考える人々にとっては、a) 防災や復興まちづくりに関する高度で多様な学修プログラムが受けられる空間として機能することが望まれるであろう。

最後に 5) 運営主体の岩手大学や立教大学関係者にとってであるが、a) ほかの場所では得られない学びの場として機能すること、b) 大学運営上の戦略的拠点として機能すること、c) 両大学の研究者がユニークな研究素材を得られる場として機能すること、d) 大学の地域貢献のフィールドとして機能することなどが挙げられるだろう。これらのうち、b) と d) は大学運営者の視点から見たメリットであり、a) と c) は個々の教員・研究者あるいは学生の視点から見たメリットである。前者と後者はとするとずれがちであることに注意しなければならない。なお、地元国立大学

である岩手大学と東京の私立大学である立教大学とでも、同キャンパスの意味付けの重心が異なってくるのは自然なことであろう。そしてむしろそれは好ましいことでもあるかもしれない。

(4) 利用主体が価値を提供しあう仕組み

2018 年度に岩手大学、立教大学、陸前高田市の三者で定めた基本方針（3 (2) 参照）は、上述の各潜在的利用者にとっての価値が収斂・交差するところに設けられていると言ってよい。

それでは陸前高田グローバルキャンパスが、潜在的利用者それぞれに対して、実際にそうした価値をすぐに提供できるかということ、ことはそう単純ではない。当然ながら、予算や人的資源によるところが大きい。予算や人的措置が大幅に好転することが考えにくい状況下において、運営側の岩手大学や立教大学が、もしくは両者協働による陸前高田グローバルキャンパスが、他主体に一方的にサービスを提供するという発想だけではどうしても限界がでてくる。そして、両大学にとってはメリットよりも負担の方が大きくなってしまいうだろう。

限られた資源のもとで運営を行い、かつ存在意義を高めていく上では、潜在的利用者それぞれにとっての価値が調和的に提供されることが重要であろう。すなわち、キャンパスの利用主体間に相互作用が生まれ、お互いに価値を提供しあうような状況が、理想的かつ効果的な状況であると考えられる。利用主体それぞれがこの空間で自分たちの活動を粛々で行うのではなく、その活動が別の主体の活動に影響を与えたり、あるいは逆に受けたりする。それが相互の活動の付加価値となることを期待するのである。

一つの例を考えよう。A 大学の教員が、学生数名を連れてボランティア活動のために陸前高田を訪問していた。日程の一部に空きが生じた。そこでキャンパスを訪問すると、立教大学の陸前高

田プロジェクトが実施されており、アメリカのB大学の学生、立教大学の学生、市民の人たちによる共同ワークショップが実施されていた。A大学の学生たちもそこにまじって、過去の自分たちの経験を踏まえて、ワークショップでアイデアを提供し、市民+A大学+立教大学の共同プロジェクトが生まれることになった……。これは架空の例であるが、実際、これに近い状況は過去たびたび発生している。2018年の夏に岩手大学の集中講義、立教大学のツアー、そして関西大学のeJIPプログラムが時を同じくして行われた際、急遽開催されたジョイントワークショップはその一例といっていよいであろう。

利用主体間の相互作用による付加価値の発生は、開設前から運営に携わる者たちの間である程度意識されていたことではあるが、こうした展開がより頻繁に、有機的に、場合によっては必然的に起こるようにしたい。そのために運営側として考えるべきことは、①利用者同士の関係性をより緊密にする機会を提供すること、②各利用主体の活動を視覚化し、相互に活動状況や予定を把握、確認できるようにすること、③利用主体がほかの主体とのジョイントの可能性を相談できるコンサルティング機能を備えることなどであろう。①については、シンポジウムが利用者間のネットワークを構築・強化していくための試みであると言える。また②については、ウェブサイト (<https://rtgc.jp/>) で他主体の利用予定が閲覧できるようになっている (図7-2-1)。しかし、いずれもまだまだ展開の余地がある。また③については、今後より積極的に検討していくべき課題である。

4 どこでもドアとしての陸前高田グローバルキャンパス

最後に、キャンパスのあり方に関する象徴的比喻として「どこでもドアとしての陸前高田グローバルキャンパス」という表現を提案してみたい。



図7-2-1 ウェブページ「開催予定の催し」(<https://rtgc.jp/schedule/>)

説明不要であろうが、「どこでもドア」は国民的マンガである「ドラえもん」に登場するSF的装置である。このドアを通り抜けることで、あらゆる場所に瞬時に移動できる。ドラえもんの登場人物たちはこのドアを通り抜けた先々でさまざまな体験をすることになる。

たとえば市外の大学に所属する利用者が陸前高田グローバルキャンパスというドアを潜り抜けると、その先には事前の想像を超えた異世界が「必ず」広がっている。その異世界とは、自分たちとまったく違う環境で学ぶ大学生であったり、外国の生活や文化であったり、地域性豊かな陸前高田の地域コミュニティや人情味あふれる人々、そして地域に息づく文化であったりする。ドアを開けるたびに異なる世界が広がっている。そしてその異世界が、高田への訪問体験を、あるいは学びの体験をきわめて豊かなものにしてくれる。こうなれば、大学関係者は頻繁に陸前高田を訪問する大きな意義を見出せるであろう。

一方、地元市民にとっては、都会の若者や海外の若者や研究者がドアを通りぬけてやってくる。キャンパスに行くと若い息吹に触れることになる。これもまた異世界との遭遇体験といってい

いだろう。そんな中で、ときに地域の問題に対する本質的な解決のきっかけや必要な知的資源へのアクセス可能性がもたらされたりする。こうしたポジティブな循環が自治体としての陸前高田市にとっても価値があることは明らかであろう。

5 陸前高田グローバルキャンパスの今後

本稿では、陸前高田グローバルキャンパスのこれまでの展開を振り返り、その意義を今後さらに高めていくための方策等について考察した。最後に今後の予定・展望について簡単に紹介しておく。

3の(2)で述べたグローバルキャンパスの二本柱の一つ「大学生が絶え間なく訪問する交流のまち、陸前高田への貢献」に位置づけられる事業として、2019年3月に陸前高田において「陸前高田グローバルキャンパス春呼び祭」を実施する準備が進められている。大学シンポジウム2018を発展させ、市民にとってより参画しやすい総合的なイベントにしようという趣旨で実施される。このイベントの実行委員会には、大学の教職員だけでなく、大学生、そして陸前高田市民にも入ってもらっており、シンポジウムのときよりも一段進んだ協働体制を組んでいる。2018年9月の時点で組織体制が固まり、具体的なプラン作りが始まった。シンポジウムに比べて準備が難しい面もあるが、なんとかよいイベントになればと考えている⁽²⁾。

またもう一つの柱である「防災・現在がどこよりも学べるまち、陸前高田への貢献」についても、立教大学、岩手大学それぞれが、震災に関する資料のアーカイブ化とそれを活かした防災等のプログラムづくりおよび実施にむけて一歩一歩積み重ねを行っている。

これらの取り組みが将来大きく花開くことを願っている。その延長線上に、災害で被災した地域に対して大学がなし得る貢献のモデルが一つ出現すると信じている。

[注]

- (1) もちろん両大学の関係者との議論に触発されたところも多い。また、本大学卒業生である越戸浩貴氏との議論に多くを触発されている。
- (2) 春呼び祭は2019年3月16日、17日の両日にわたって行われ、参加大学生100名以上、参加市民およそ100名、来場者700～800名と盛況であった。参加大学、そして大学と市民の間にこれまで以上に強いネットワークが構築されたと考えている。

[参考文献]

- 五味壮平「どこでもドアとしての陸前高田グローバルキャンパス」、『陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム2018 要旨集』、2018、pp.111-113。
<https://rtgc.jp/wp-content/uploads/2018/03/c7d5497549649af22aba7de7eae216ca.pdf>